

私たちの町、今とこれから

1年3組

●今の私たちの町

その時、まあ余に言う3月11日は卒業式の前日だったので、卒業式の練習やら小麦粉処分大会やら同窓会入会式やらなんやかんやで、変に忙しかった。帰りの会の直前にカタカタと揺れが来たので(2日前の余震か?)とも思ったが、揺れが長く、大きくなっていく。先生が「机の下さ入れ！」と指示を出したので、急いで机の下へ潜った。

長い、大きい。今までにない揺れだった。天井から吊るされている照明が尋常じゃない揺れ方をしているな、と思った瞬間、電気が切れた。校庭にできた地割れを見物していると、体育館に避難！の指示が出た。

体育館に全校生徒が避難して暫くすると、大津波警報の防災無線が高らかに鳴り響いた。揺れてから30分は経ったころ、引いていた潮が急激に膨れ上がり、一気に波が防波堤を超え、溢れ出した。「防波堤、波超えたぞ！」と思わず叫んだ。それと同時に「広水のグラウンドさ逃げろ！」の指示。体育館にいた全員が駆け出した。斜面を這い上がり学校を眺めると、濁流が学校に押し寄せていた。(あと1分遅かったら…)と思うとゾツとした。

第二波が引いた後、広田小へ移動して、当分の間待機ということになった。停電のため、体育館の中もだんだん暗くなる。暫くして某氏のお母さんが迎えにきて、長洞(ながほら・僕たちの住んでいる地区名)の人は一緒に帰ろう、という事になった。某氏のお母さんの灯りを頼りに僕たち約十人は山を歩いた。星と月が輝いていた。途中近所のおっちゃんと会って、「大長根新屋(おながねしんや・僕の家)の屋号あ長屋無いぞ」と情報を得た。この夜から親戚宅にお世話になることになった。

翌日、母と家に行った。一階は窓ガラスの破片と庭の砂利と泥と瓦礫で埋め尽くされていた。二階は無事だったので、布団などを取り出した。



・撮影日時 平成23年3月18日

・場所 家の近所

・コメント 流れ着いた長屋を捜索中。

●これからの自分

僕の家は一階が浸水し、家具流失・損傷などの被害を受けた。人間、欲望がエスカレートするもので、3月11日以後一週間ほどは「助かって良かった〜」と泣いて喜んだというのに、次は「家が欲しい」「腹が減った」「服をよこせ」、である。

現に、僕の家は確かに現存しているのだが、父はまだ家建てたときのローンが残っているというのに、さらにリフォームのローンを重ねることになる。あくまで父の年齢を考慮してのことでの判断ではあるが、過疎地であるゆえ、高齢者の暮らす世帯などは、「いまさら新築・改築で借金は出来ない」としている。早い話、借金が出来ないということは新築・改築が出来ないのだ。事実、長洞では5軒ほどその理由で解体している。

さて、このたびの津波で長年にわたる「ご近所付き合い」が見直されている。いつもなら(汚い言葉で言えば)ウザがられるような関係なのだが、ふるさとを守る人々の思いは強いものだった。

僕の住む長洞地区は200人60戸全てが親戚づきあいである。それゆえ津波の日の夜から早くも「長洞地区本部」を立ち上げ、米を炊き、火を灯した。今回長洞地区が一つになり、土地を分け合い仮設住宅を誘致した。7月中には入居できる予定だ。これから漁港、田圃の復旧など、「ご近所付き合い」はさらに必要になってくる。

今回自分の地区の「近所のおじさん達」の活躍を通して、みんなで一つのことを協力してやれば何だってできる、ということを教えてくれた。長洞のオヤジ達の活躍は3度もテレビで取り上げられ、ついには調子に乗って公式ブログまで立ち上げた。

(⇒<http://iwate03.blog.ocn.ne.jp/blog/cat11736530/> 「長洞元気村」で検索して下さい。)

元の長洞に戻せることは残念ながら叶わないが、限りなく以前の生活に近い物を目指して、僕達は走り続ける…。



・撮影日時平成23年1月3日

・場所 自宅

・コメント 在りし日の長洞、幸い虎舞は全て無事だった。